2012年（平成24年）1月4日（火）毎日新聞・秋田面

将来像 住民とともに描く

日赤秋田看護大助教で岩手県初の男性保健師 佐々木亮平さん

きずなっこ あきた—東北 ③

東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市。年の瀬も迫った先月26日、内陸寄りにあり津波を免れたコミュニティーセンターでは、秋田市の日本赤十字秋田看護大助教で保健師の佐々木亮平さん(36)ら、被災者の医療や保健福祉に関わる専門家やNPO、行政担当者らが60人以上集まり、活発な意見交換が行われていた。

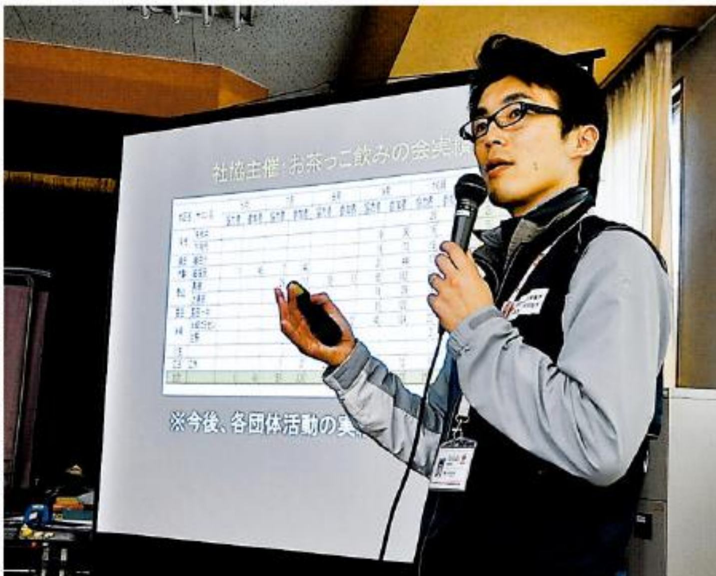
「（仮設住宅などで）サロンを開いても男性の出席者が少ない」「体操教室を続けているが、若い人や男性も参加してくれる」「遺族の相談を受け付けている。利用を進めてほしい」——。参加者らはそれぞれ活動の現状や課題を報告した。

この集まりは、現場対応に追われがちな関係者が分野を超えて集まり、情報を共有し、まちの将来像を描き出そうという「包括ケア会議」だ。震災直後の昨年3月末に発足し、月1回開かれている。取り仕切るのは佐々木さん。復興を富士登山になぞらえ「散歩ついでには登れない。計画があって初めて必要なものを準備することができる」と会議の意義を説明する。

◇　◇

佐々木さんは盛岡市出身。岩手県初の男性保健師となり、県職員として保健所に勤務していたが、07年から3年間は人事交流で陸前高田市へ。地域の保健推進員との会合を増やしたり、NPOや子育てサークルなどにこまめに顔を出すなど、丁寧に地域を回り、住民と信頼関係を築いた。陸前高田は佐々木さんにとって「第二の故郷」だと言う。

陸前高田は「第二の故郷」



スクリーンにスライドを映しながら、会議を進める佐々木亮平さん＝岩手県陸前高田市で

震災では当時の同僚保健師9人のうち6人が犠牲になった。「被災地の苦しみが分かる。つらいが悲しんでいる暇はなかった」

震災6日後に日本赤十字社秋田県支部の医療救護班の一員として同市内に入った。市は中堅職員の多くが亡くなり、通常業務もままならない状態。佐々木さんはかつての仲間という〝顔の見える関係〟にある自分が「調整役になるしかない」と腹をくくった。

4月から包括ケア会議の進行役を引き受け、知り合いの市民グループなどにもどんどん参加してもらった。子育て支援団体の女性は「亮平さんに誘われたから参加した。この会議を積み重ねて復興へ前進したい」と話す。

佐々木さんの元上司で、陸前高田市健康推進課の菅野道弘課長は「亮平さんは内からも外からも見られる人。たくさんの団体が入ってくる中で何が必要かを理解している」と評価。包括ケア会議をともに引っ張ってきた東京都千代田区のヘルスプロモーション研究センター長で医師の岩室紳也さん(56)は「さまざまな立場の人が会議に参加しやすい雰囲気を作っている。佐々木さんは〝絆作りの名人〟」と話す。

◇　◇

佐々木さんは大学の業務の合間を縫って陸前高田に通う。秋田に戻っても細かな連絡が絶えず入り、多忙を極めるが、「定期的に被災地に入ることで、みんなが立ち止まって時間を共有し、将来を考える時間を持てれば」と話す。

「震災で改めて人と人との関係性を考えさせられた」という佐々木さん。「一人一人が住みやすい町」を住民とともに作り上げるのが願いだ。　【小林洋子】

＝つづく